

次代の日台関係を担う若い人々へのバトン

独立行政法人国際交流基金 日本研究・知的交流部
企画調整チーム兼欧州・中東・アフリカチーム 河野 明子

42年前の約束

1972年10月某日。日本、京都。紅葉の季節。京都国際会館の庭園。同級生の林文月教授が言った、「そうね、私は『源氏物語』を翻訳するわ。あなたは『平家物語』を翻訳してね」。

これは42年前、同級生二人の間に交わされた、二言のない約束であった。約束という言葉が重いなら、励まし合いと言ってもいい。

これは、東華大学名誉教授の鄭清茂先生が今年8月に上梓された『平家物語』の中国語全訳注（洪範書店）の序文の、冒頭部分です（筆者による仮訳）。「林文月との42年前の約束を果たして」との見出しで、8月14日付の中国時報に転載されました。この42年前の約束をついに果たしたお二人について、ご紹介したいと思います。

林文月先生

散文作家、日本古典文学翻訳家、そして中国古典文学研究者である林文月先生（台湾大学名誉教授）は、1933年、上海の日本租界に生まれ、小学5年生で終戦を迎えるまで日本語を母語として育ちました。父は台湾彰化県出身で、上海の東亜同文書院を卒業し、三井物産株式会社上海支社に勤務。母は台湾台南市出身で、連雅堂の娘にあたります（連雅堂は、日本統治時代初期に台湾人による初めての通史『台湾通史』を著した文人。孫には林先生のほか、連戦・国民党名誉主席もいます）。

林先生は、随筆の中で、小学生のころ下校途中に必ず立ち寄っていた本屋の日本人店員が、幼い

林先生の立ち読みをいつも温かく見守り、高い場所にある本も取ってくれたり、雨に濡れた林先生を休ませ、迎えに来るよう家に電話してくれたりした思い出を、本とは切り離せないその後の人生の原点として感謝の念とともに綴っているのですが、その本屋とは内山鑑三が経営する内山書店の上海支店のひとつであった、というのは興味深い逸話です。

戦後、家族とともに台湾に移り住んだ林先生は、初めての中国語での学校生活をその聡明さと努力とで乗り越え、現在の台北市立中山女子高等学校を経て、52年、台湾大学中国文学科に進学しました。このとき、戦後の台湾大学中国文学科に合格した初めての台湾人（本省人）同士として鄭清茂先生と出会い（それまで中国文学科の入学生は皆、戦後に中国から渡ってきた外省人の師弟たちでした）、二人はそれから現在まで続く深い親交を結ぶことになります。

修士課程を修了後、同学科で教鞭をとっていた林先生は、69年に初めて来日し、京都大学にて1年間、「唐代文学の日本平安朝文学に与えた影響」について研究しました。このころ、雑誌『純文学』の編集長を務めていた作家・林海音からの依頼を受けて同誌に寄稿したことから、林先生は散文作家としての道を歩み始めます。中国古典文学研究者としての素養と日本に対する深い愛情をもって日々観察した京都の人々の生活や風習を綴った連載は好評を博し、71年に『京都一年』として出版されました。同時代の日本を伝える散文はほとんどなかった当時、この『京都一年』は、作家の白先勇をはじめとする台湾の文化人や学者、学生、

一般読者の間で評判となり、日本理解の指南書・旅行案内として、多くの人々がこの本を手にも京都へ旅行や留学に赴いたといえます。

また、論文「桐壺と長恨歌」を雑誌『中外文学』に掲載したところ、『源氏物語』「桐壺」の帖の中国語訳が反響を呼び、続きが読みたいという読者からの手紙が編集部が届くほどでした。こうして林先生は『源氏物語』全54帖の中国語訳に取り組み、『中外文学』に73年4月から78年12月までの66ヶ月間連載、つまり5年半をかけて完訳しました。大学教授として研究と教育に従事し、また幼い二人の子どもを抱えていた林先生にとって、66ヶ月休むことなく掲載を続けることは決して容易いことではなかったでしょう。その訳注は、学術的にも文学的にも極めて評価が高く、最大の難所といわれる和歌についても中国語の歌として文学的に成立させて、台湾の国家文芸賞翻訳成就賞を受賞したほか、中国でも出版されました。

『源氏物語』の中国語訳は林先生のほかに中国の豊子愷によるものが知られていますが、その翻訳は文化大革命等により出版が遅れ、彼の死後、80年に出版されました。林先生が香港の友人に依頼して豊の中国語訳を手にするのができたのは、87年になってからのことだったそうです。

その後も林先生は、『枕草子』、『和泉式部日記』、『伊勢物語』、また樋口一葉『十三夜』を出版し、表紙絵や挿絵も自ら手掛けました。台湾大学を退職したのち、米国のワシントン大学、スタンフォード大学、カリフォルニア大学バークレー校、チェコ共和国のカレル大学等の客員教授を歴任し、日中の文学を学ぶ各地の学生たちを指導しました。

鄭清茂先生

日本古典文学翻訳家、そして中国古典文学・日本漢学の研究者である鄭清茂先生（東華大学名誉教授）は、林先生と同じ1933年、台湾嘉義県に生まれ、やはり小学5年生で終戦を迎えるまで日本

語を母語として育ちました。嘉義華南商業学校を卒業後、決して裕福とはいえない家庭環境ゆえに、家族から大学進学を反対されましたが、優秀な成績を認められ、学費免除で台湾大学中国文学科に入学し、林文月先生と出会います。

戦後の台湾では児童向けの読み物が不足していたため、東方出版社等の出版社は、日本語のできる人材を用いて日本語の読み物を中国語に翻訳し、児童向け世界名作文学シリーズを出版して好評を博しました。鄭先生は林先生と協力し、『ジャンヌダルク』、『キュリー夫人』、『ナイチンゲール』、『椿姫』、『若草物語』、『モンテ・クリスト伯』等を翻訳し、幼い読者たちを喜ばせました。このほかにも、胡適・中央研究院院長他のために日本語の文献資料を、また貝塚茂樹、高木正一、山田統ら日本における中国研究の成果から、当時の日本の流行小説まで、様々なジャンルの文章を翻訳しました。鄭先生は「生活費を稼ぐためだった」と振り返っていますが、公的な場での日本語使用が禁じられていた当時の台湾社会においても日本語に触れるための努力を欠かさなかったことがうかがえます。

修士課程を修了後、62年、米国プリンストン大学に留学。そこで文芸評論家の江藤淳と親交を結んだほか、日本の漢学が近代中国人作家に与えた影響にいち早く着目して研究テーマとし、中国文学者の吉川幸次郎の信頼を得て、その著書『宋詩概説』や『元明詩概説』を翻訳しました（後者で台湾の国家文芸賞翻訳成就賞を受賞）。マサチューセッツ大学アジア言語文学科の教授として30年にわたって日本に対する客観的視点と親しみを持つ人材を育成し、79年には同学科主任教授として、国際交流基金のフェローシップを受け、東京工業大学にて研究しました。

その研究と教育の成果、温和で謙虚な人柄は広く信頼を集め、台湾大学中国文学科の客員教授を務めたほか、94年に開設された台湾大学日本語文



平成 26 年秋の外国人叙勲伝達式にて。左から鄭清茂・東華大学名誉教授、林文月・台湾大学名誉教授、沼田幹夫・台北事務所代表（2014 年 11 月）

学科の教授として台湾に戻り、続いて新設の東華大学中国文学科に主任教授として招かれました。東華大学を退職したのち、2年をかけて『奥の細道』を翻訳、2011年に出版しました。

こうして太平洋を行き来した年月の中でも決して忘れることのなかった『平家物語』の翻訳に着手したのは、その後のことです。鄭先生が「これほどの重要な古典名著を前にして、怖れの気持ちを抑えることができず、一字一句慎重に推敲を重ねるのだが、それが足手まといになり、度々書き変えるので訳文はなかなか定まらなかった」（冒頭に紹介の序文より）と振り返る3年の日々を経て、とうとう今年8月、約束が果たされたのです。林先生の強い希望で、鄭先生の『平家物語』は、林先生の『源氏物語』と同じ、日本古典文学に定評のある洪範書店から出版されました。

戦後、そして日台断交後の日本理解を支え続けた日本語世代

少し長いご紹介となりましたが、林文月先生、鄭清茂先生をはじめ、さまざまな分野で活躍する日本語世代（日本統治時代に日本による教育を受けた世代）の半生に触れることは、私にとって大きな喜びであり、身が引き締まるような驚きでもありました。その背後にある戦後の日本と台湾の

社会文化状況、そして日台をめぐる様々な環境の変遷が、本で読んで知るよりもずっと具体的に立ち現れてくるように感じられました。

林先生の『京都一年』が出版された翌年の1972年9月、日中国交正常化に伴って日台の外交関係は途絶え、台湾は日本製品のボイコットに沸き、それまでも増して日本との交流を積極的に進めるには難しい状況となりました。それでも、日本の文化や日本人の生活を深い描写で淡々と綴った同書は当時から多くの読者を得て、40年以上経つ今も再版を繰り返して読み継がれており、林先生の散文文学について、とくに『京都一年』についての学位論文を書く学生もいるほどです。2006年には北京の三聯書店から出版され、中国の読者にも日本文化を伝えています。

以下に、私がお人柄に触れる機会を得た日本語世代の方々をご紹介します。

蔡茂豊・東呉大学名誉教授は、72年の日本語文学科一期生入学と同時に日台断交を迎え、これから日本語を学んで何の役にたつのだろうと不安がる学生たちを叱咤激励しながら、高度な日本語能力を備えた人材を各分野に送り出しました。

何瑞藤・台湾大学名誉教授は、民主化が進む94年、台湾大学に開設された日本語文学科の初代主任として人材育成に尽力し、日台青少年交流を推進しました。



平成 26 年秋の外国人叙勲伝達式にて。左から陳伯陶・淡江大学名誉教授、沼田幹夫・台北事務所代表（2014 年 11 月）

陳伯陶・淡江大学名誉教授は、日本語文学科に修士課程を設立した他、日本の大学との相互交流、また兵役前の男子学生の日本留学の道を切り拓きました。

台湾大学図書館の曹永和先生(中央研究院院士)は、台湾大学に残る日本時代の和書の保存に尽力し、学术交流の発展に寄与しました。今年9月、曹先生は93歳で永眠されました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

中央研究院近代史研究所の黄福慶先生は、日台交流を担う双方の若手研究者の育成に尽力し、歴史学を中心に日台間の学术交流を現在の活況に導きました。

同じく中央研究院近代史研究所の林明德先生は、史実に基づく実証的歴史研究を重視し、日本に関する大学教科書を執筆して、客観的な歴史理解の促進に尽力しました。

俳句の会「台北俳句会」を70年に創設した黄靈芝代表は、日本の文芸である俳句を通じて、長年にわたり日台交流を促進し、いまも会員たちの作品に手書きの批評文を寄せるなどして指導しています。

故・呉建堂氏が68年に創設した短歌の会「台湾歌壇」では、蔡焜燦代表、鄭煒耀・前代表をはじめとする日本語世代が毎月歌会を開催し、日本の文芸である短歌を通じて、日台関係の深さと重要性を日台双方の若い人々に伝えています。

当たり前のことではありますが、「過去40年来で最良の状態にある」と言われる近年の日台関係は、以前からあったものではなく、日本を深く理解し、関心と愛情を寄せてくださる日本語世代の方々が、日台間を繋ぐあらゆる分野で忍耐強く支え、切り拓き、前に推し進めてこられたからこそ初めて獲得されたものなのだと、これらの方々の半生から教えていただきました。

次代の日台関係を担う若い人々へのバトン

長年にわたり各分野で日台関係を牽引してこられた日本語世代が表舞台から去りつつある中、交流協会で文化事業を担当するひとりとして、これからの日台関係を担う若い人々に日本についてより深く知ってもらうため、また、若い世代に日本への関心や深い日本理解を伝えてくださる先生方をサポートするための諸業務に従事できたこと、日本語世代のお話を直接お聞きできる時期に間に合って台湾勤務の機会をいただけたことは、私にとって大きな幸いでした。その喜びは、日本語世代の皆さんに接する機会が増えるほど大きくなり、そして「今できることをひとつでも多く」という焦燥感にもなりました。

若い世代に関わる交流協会の業務には、各種広報、日本語教育、青少年交流、文化芸術交流、日本留学、日本研究の促進のほか、修学旅行や観光の促進、ワーキングホリデー等があります。有難くまた心強いことに、これまで走り続けてくださった日本語世代のバトンをひとつでも多く確実に、若い人々の手に渡していくために力を尽くしているのは、交流協会だけではありません。日台双方の大学や高校をはじめとする教育・研究機関とその先生方はもちろん、企業、地方自治体、ロータリークラブ等の交流団体、スポーツ団体、民間財団、日本人学校の先生方や在留邦人、留学生、そして台湾日本人会と台北市日本工商会の方々が、それぞれの視点や得意分野を生かして数多くの日台交流の機会を創り、また支えてくださっています。東日本大震災の後、台北事務所を訪ねてくださる皆様のお話から、日台双方が共感点や共通課題を認識し、日台間で共有する関心事項や社会的課題について情報交換や協力を進めよう、一緒になにかやってみようという動きがますます拡がりつつあると感じ、実際に数多くの事業に

参加させていただくことができました。

いま私は、海外における日本研究や日本との対話を推進する部門で、欧州・中東・アフリカ地域を担当し、文学・思想・歴史等の人文学と、政治・外交・経済等の社会科学の両方で、日本について深く、そして客観的に理解してくれる層をひとりでも多く海外に持つことの重要性を、改めて感じています。例えば、林文月先生による『源氏物語』中国語訳の連載を読んで日本古典文学研究を志し、東北大学に留学したという陳明姿先生、中国文学科で林先生の薫陶を受け、京都大学留学を経て日中比較文学研究に従事する朱秋而先生は、台湾大学日本語文学科教授として後進を育てています。林先生や鄭清茂先生の薫陶を受け、日本文化への理解をもって中国・台湾文学（国語）を教える先生方が台湾各地にいることにも、大きな意味があると思います。人材育成は10年、20年、あるいはそれ以上の時間を経て初めて花が咲く、息の長い取り組みですが、日本を理解する人こそが経済貿易をはじめとする各分野の日台関係を支える基盤となるという意味で、日々の業務が各分野

で日台間を繋いでおられる皆様の仕事と繋がっていると信じます。

日台間は、週400便のフライトが行き交い、年間約400万人が往来するなど、共感と信頼感をもってより深く理解し合うための素晴らしい環境を備えています。国際交流基金の各種事業や特定寄附金制度等が少しでも日本語教育や日本研究をはじめとする日台交流のお役に立てるよう、ささやかではありますがこれからも努めていけたらと思っています。

最後になりましたが、台北勤務中、常に温かくご指導くださいました日台双方の皆様へ、厚く御礼申し上げます。交流協会での仕事を通じてお目にかかることのできた皆様との出会いは、私にとってかけがえのない励ましとなっています。本当にありがとうございました。

(2010年8月から2014年9月まで、交流協会台北事務所文化室主任)